

R-01

Whose Anthropocene? By Whom is the Anthropocene Narrated?:

The Anthropocene as a historical discourse and problem of subjectivity in history

寺田 匡宏 (地球研客員准教授)

「誰のためのアンソロポシーン、誰によって語られるアンソロポシーン、歴史言説としてのアンソロポシーンと、歴史における主体性。」

歴史とは人間が作るものだが、人間がそこに入れられるものでもある。それは、総合的な過程だが、これを、ドイツの哲学者、カール・レーヴィットは、英語の「する」「される」という用語を援用しつつ、歴史のダイナミズムと呼んだ。この受動的でもあり能動的でもある歴史における人間の位置は、歴史が、語れるものであることから来る。

歴史は、人によって語られ歴史になり、人はそこに入る。アンソロポシーンという概念は、地質学的な時期区分であり、それは人間の歴史を、全地球史に接続しようとする。地質的な過去は、通常は歴史とは呼ばれない。そのような、非歴史的歴史を人はどのように歴史として語れば良いのだろうか？

日本の政治学・思想家の丸山真男は、古事記に見られる「なる」、あるいは「becoming」という考え方を素材に、日本の歴史意識の古層として、そのような歴史のダイナミズムの語りがあることを明らかにした。だがこれは、1930年代の日本において、ファシズムと超国家主義の論理を支え、その対外的膨張の基礎となる理論ともなった。

プラネタリーバウンダリーが明らかにされ、アンソロポシーンという言葉が科学的に唱えられている現在、自然と人間を繋ぐ、新たな、開かれた語りは、どのように可能なのだろうか。それは、アンソロポシーンが提起する大きな問題である。

